

楠 幸男

昭和23年3月学部卒業
名誉教授

序 ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（方丈記）の如く世の中は絶えず変化するが、近年その変化は加速度的に早く、時には激流となり世を一変する。私は第二次世界大戦の終戦の年（1945）に京大数学科に入学したが、終戦前には勤労動員や大阪大空襲で被災、戦後は極端な食料不足による飢餓時代を奇跡的に生きのび今や93歳になった。気付いてみれば同級生や同時代の colleague も殆どいなくなった。この折京大数学同窓会が発足し、現会長を努める井川さんが尋ねてきて、同窓会誌に私の渡米当たりのことを書いて貰えないかとのことで考えてみた。もう古いことで記憶も少し怪しいが、世の移り変りの一片を、数学生活を中心に書いてみることにした。

渡米

私の研究は函数論の中でも特に開リーマン面（Open(=non compact) Riemann Surfaces）で、またその中でも特にその面上のアーベル積分論であった。しかし、その研究を始めてみると、古典論（閉リーマン面）と全く違って、そこは木も殆どない高い山のような山だった。しかしそれゆえ開拓し木を植えたい気持から必死で頑張り、足かけ10年近くかゝって、リーマンの写像定理の一般化にあたる関数の存在を与える理論を示すことができた（1959）。またその後もその拡充や応用を考えていた。そして1962年ニューヨークのクーラン研究所の Bers（ベアス）教授のお声掛けで同研究所に行くことになった。



筆者と Bers 教授

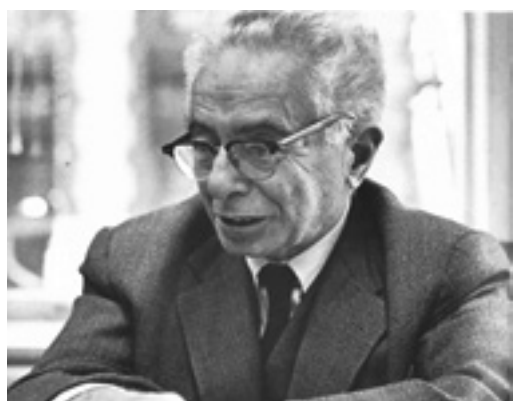
戦後渡米というと氷川丸¹で渡航したようだが、だんだん航空機になってきた。私は英会話は少し習ったが不安のまま1962年8月（アメリカの学期は9月からゆえ）羽田から日航の jet でハワイに飛んだ。当時渡米には公用ビザが必要なためアメリカ領事館（私の場合は神戸）へゆき、そこで胸部 X 線写真を取り、これをハワイの入国審査のとき見せよとのこと、その他荷物は1人40kgまで等。ハワイ到着後すぐに X 線写真の審査があって私は幸い合格であったが、不幸

¹氷川丸は現在も横浜港に係留され、中に入れば当時の人の苦勞が偲ばれる

にして不合格の人はすぐ帰国させられた（厳しい！）。次に手荷物は完全にひっくり返されいちいちこれは何だと聞く。そしてようやく解放されてホテルについた。1日休んで米国機でサンフランシスコにつく。ここではスタンフォード大学に出張中の伊藤清先生に大変お世話になり、次はニューヨークへ飛んだ。ニューヨークでは予約してあったホテル（Master Hotel）につくと早速案内してくれた部屋は今流でいえば1DKであるが何と23階であり、雲の上に住むような気がした。

クーラン数理科学研究所 (Courant Institute of Mathematical Sciences(CIMS))

これはニューヨーク大学 (NYU) の付属研究所で学生は大学院生のみで、数学、応用数学や物理およびコンピューター関係等の研究所で、建物はそれぞれ分かれている。



Courant

私が行くのは数学部門で、始めて行ったときそのあたりは葉巻の臭いのきつい古いビル街で、その一つのビルの6階であった。ちなみに部屋の順でいうと

L. Bers, L. Nirenberg, P. Lax,
J. Schwartz, Visitors, P. Garabedian

の office であった。Visitor 室にはその前年から G. Stampacchia (スタンパキア) がいて私は彼と同室だった。彼は大らかなイタリア人で面白いことを言ったり、また “I have nothing to do” とかいていたが、それは私に気楽に

やれよ言ってくれていると思った。また他の教授連どうしも first name で呼び合い堅苦しさは感じなかった。(但し Bers に向って Lipman (あるいは Lipa) と呼ぶ人はいなかった。大分年が上だからか)。当時私は1959年の論文の続きを考えていたがこちらに来てからの研究で幸い一つの論文が書けたので Bers さんにみせると “面白い！この結果は知らない” と喜んでくれた。そして “来年もう1年いてほしい” と言ってくれてうれしかった (これで家族を呼べそうだ)。ここでは特に obligation はなさそうだから私は Bers の院生 (B. Maskit や L. Keen 等) のいる部屋に時々行っては話をしたり、質問を聞いたりした。前期には客員教授できていた L. Schwartz の講義を聞いた。聞いていたのは院生が多かったように思う。もう内容は覚えていないが、岡先生の仕事など多変数の話も出て来て最後まで聞いた。また後期(?)には Bers の “多変数関数論” の講義を聞いた。このようなことから自分も前から考えていた多変数の問題をもう一度考えて見ようと思った。半年後(?)に一つの結果をまとめたので Bers さんにみせると、その論文をその方面の専門家 Bremerman に送り、少し後にその返事の手紙を見せてくれた。それによると彼は面白いところがあること及び若干の注意が書いてあった。それで早速書き直し、これは京大紀要に送り、恩師小堀憲先生の還暦

記念献呈論文集（1964）に間に合ってよかった。

ここで話は少し脱線するが 1962 年から 63 年にかけてアメリカは激動の時代であった。62 年の 10 月頃から Hotel や街のレストランでの人の話をもれ聞くと、いまにもソ連の原爆がとんでくるかも知れないということを心配する声であった（キューバ危機）。あるとき Hotel の近くで、この辺ではどこに shelter があるかと私にきく老人もいた。私は新聞を読まず、テレビも見なかったから社会情勢を知らなかった（後程知ったが、その頃ソ連が攻撃用ミサイルをキューバに設置したからアメリカは海上封鎖、事態はますますエスカレートし対決、核戦争の危機が迫っていた。そして最後の交渉でソ連がミサイルを撤去することで収まった）。また 1963 年には黒人の公民権運動で暴動が多発。そして 1963 年 11 月 22 日に「ケネディ大統領暗殺」という大事件に発展した。

その 11 月 22 日私は研究所に出かけ、その午後（2 時？）コロンビア大学で開催予定の小平邦彦氏の講演を聞くつもりだった。昼頃から研究所の気配が何か異様で、来ていた人が何もいわずに帰っていった。私も出かけてコロンビア大学に行くと講演は中止。事件を知った。そこでコロンビア大の倉西さんと吉沢太郎（東北大）さんに出会った。仕方がないから倉西さんの案内で少し離れたところにある Fort Trayon Park へ 3 人は散歩にでかけた。そこはハドソン川にかかるワシントン大橋の見える美しく大きい公園である。そこで何と、1 人で散歩中の小平さんにパツタリ出会った。そしてしばらく立ち話をして別れた。（今日は何と確率 0 に近いことが起こった日か）。

パーティについて こちらに来てからパーティの多いのに驚いた。それはほぼ家庭的なもので、新しい人や客の歓迎や相互の親睦など有効に使われている感じをうけた。二、三の例を挙げてみると、

- Nirenberg の 2 度目のパーティで知り合えたのが倉西正武夫妻であり、それ以後いろいろお世話になり、日本に来たときはご夫妻を自宅に招いたこともあった。
なおそのパーティからの帰路、倉西夫妻が自宅に寄りませんかとのことで私はお邪魔した。丁度よい機会と思って、倉西さんに「私はいま英会話コンプレックスに悩まされていますが、何かいい方法はありませんか」ときくと彼は自分も初めはそうだった。それで毎日、映画を見に行っていたが、これはよかったと思うとのこと。あとは日本語で雑談して楽しくなった。この翌日から私も映画館行きを始めたが結局 3 日坊主であった。しかし若い人には倉西効果があるかも……
- Bers パーティ これはやゝ違ったパーティであった。Bers の家は New Rochell という町で、ニューヨークから郊外電車で 30 分？位の処。そこは高級住宅地で研究所の教授も多く住んでいると聞いた。家に入ると最初、ロシア人の Sobolev と Bers とが話していた（多分ロシア語で）が私が来たので英語で話すようになった。

そして食事はこの3人だけだった。ところが食事がすんだ頃から続々人がやって来て飲む会になった。照明は少し暗くするのでよく分らないが25, 6人で日本人は私だけだった。夫妻で来ている人が大半だったから、私が1人でポツンとしていたとき、クーランさんが近づいて来て、今は何を研究しているのかと尋ねてくれたのでこの歴史的な人としばらく話げできた。

- 松阪パーティ 1964年の2月頃?と思うが雪の日にボストンに行きハーバード大学の Ahlfors 先生を尋ねた。最近の研究について話をしてから先生の車で Faculty Club (?) でランチをご馳走になり、昼から先生のゼミに出席させてもらった。そこからが不思議と記憶がなく、誰かの車にのせて貰って着いたのが同級生松阪輝久君 (Brandeis 大学) の家だった。(私はこの日ボストンに行くことすら彼に知らせていなかったのに……)。彼は、これは在米の京大関係の人を集めたパーティだとか (surprise party か?)。実際そこで中井喜和、広中平祐、松村英之の3氏に会ってびっくり、松阪君の友情に感謝しながら楽しい一時を過ごした。今思うと、京大数学同窓会のアメリカ支部会ともいえる?

国際交流

- a) 2年目に家族(妻と娘3人)を呼ぶために Master Hotel から少し広いアパートに移転した。そこは Fort Trayon Park の近くで、割りに近くにある公立小学校に長女を、下2人を付属の Kindergarten に入れて貰った(これには小学校に行って校長と相談した)。家族は英語が全くできなかったことを知った Friedrichs 夫人 Nellie さんはボランティアとして週2回、研究所のどこかの部屋で家族に英語を教えてくださった(教材は自分で作って)。これもあって子供達は休まずに通学してくれた。これを機に Friedrichs さんとは家族ごとの交際が続き、ご夫妻が来日の際には拙宅にもてなした。また Kindergarten の Elaine Klein (née Cohen) さんは家族の帰国前に私の子供のために“Fairwell Celebration”として、園児を Fort Trayon Park へピクニックにつれてゆくから来て下さいという通知をくれたので妻と2人ででかけた。(これは当時日本人は娘だけであったからか?)。

日本もこれから多数の外国人の受け入れを予定しているが言語の壁や待遇など問題が多いと思う。なお Klein 家とは娘を通じて現在も交際がある。

- b) CIMS で同室だったスタンパキア (Pisa 大学) はニューヨークでは、顔面神経痛だといいいながら車を運転して私のアパートにも来てくれたこともあった。そして君が帰国のとき Pisa に寄らないかと言ってくれていたので行くことにした。ピサ大学のそばに Scuola Normale Superiore という数物の研究所があり、私はここで講演した。彼は当時は元気そうだったが早世した (1922—78)。アーメン。ピサ滞在中は森川さん (名大) と Murthy (エジプト?) 氏にお世話になった。

c) 日米セミナー　これは時期的には 1964 年より大部後のことであるが、これまでの記事と関係が深いので記したい。私は 1964 年に帰国したが、この年から日本では海外旅行の自由化が始まった。これはその年に東京オリンピックが開催されることになったからであろう。(ついでに、この年に新幹線東京-新大阪間開通、阪神タイガース優勝)。また 1968 年から 70 年にかけては大学紛争(欧米でも)があり、消耗しきった。その後途絶えた国際交流も徐々に復活したので、私は日本学術振興会の協力により 1974 年 Bers 教授を京大に招へいすることができた。かれは東大や阪大でも講演したが大半は京大数学教室で講演やゼミで新しい研究を指導した。その折彼は私に突然「クライン群とリーマン面」というタイトルで日米セミナーをやらないかと提案した。私はその準備や可能性も分からないが、日本の研究者に役立つものと思い、その実現に努力することを約束した。両国のいろいろな事情があって後れたが、1979 年ハワイ大学の協力もあって、ホノルルの East-West Center で日米セミナーを実現できた。米国側は Ahlfors, Bers をはじめそうそうたる研究者が参加、日本側は私の同僚(黒田, 及川, 赤座, 柴田の 4 氏)の協力により、伸び盛りの研究者を中心に参加することに決めた。双方で約 50 名で 5 日間の日程であった。最後に、日米セミナーの会場がハワイになったのは両国から近いということであったと思うが、結果的には米国がホスト役を受け持った訳である。そのホストだった Bers さんが途中で C. Earle 氏に変わり、彼が実質的な世話役で大変だったと思うし、お 2 人に感謝の他はない。私より 10 歳程若い Earle さんも去年なくなった。ご冥福を祈るばかりである。(2018 年 12 月)

付記 上記の日米セミナーの数学的内容の記録は日本数学会発行の雑誌；

数学 **32**(1980), 76—83, 岩波書店

にある。



Bers 教授と Ahlfors 教授